

PLUS i Alius VOL.3



- プラスアイには読者に新しい価値や考えを提供する、という意味がこめられています。
- Alius は「別の」という意味のラテン語です。



学生部会

- 七夕 浴衣着付け教室
- おすすめのアニメーション映画

投稿

- 神奈川大学民俗学研究会のこれまでの歩み
- かながわユースフォーラム 2024 を終えて
- 鶴見国際交流ラウンジ訪問記 —多文化共生のまちづくり
- 鶴見国際交流ラウンジ紹介
- 台湾日記 —台湾でシャッターを切る

学科活動

- スペイン語スピーチコンテスト
- タスマニアの美術館MONAへの訪問 (英語英文学科)

ゼミ活動

- 角山ゼミ 「鎌倉別館40周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」を鑑賞して
- 秋山ゼミ 「横浜トリエンナーレ」フィールドワーク
- ウェルカーゼミ 秋葉原探訪レポート
- 台湾国立中山大学との交流セミナーの開催 —観光文化コースのコース演習I 崔クラスの取り組み—

講演会

- 「アイヌ語」開講記念講演会 (第2回) 報告

七夕 浴衣着付け教室

浴衣着付け体験を通して日本の伝統文化に触れる

外国語学部 中国語学科4年

橋口京佳
小林琉夏



七夕飾りの前での集合写真

開催のきっかけ

浴衣着付け教室の開催の案が出たのは2年前の夏でした。当時「日本の伝統文化を知る」というテーマで折り紙教室を開催した後だったため、同じ日本の文化につながる浴衣着付け教室を提案しました。2024年度から学生部会メンバーも増え、新体制一発目のイベントとして開催することになりました。みなとみらいキャンパスの1階には七夕の時期になると笹の葉に短冊が飾られるので浴衣と合わせて日本の七夕文化を体験してもらおう機会にしたいと考えました。

当日の様子

今回の浴衣着付け教室はみなとみらいキャンパス5階中小ホールにて20人程度で開催し、浴衣の着付けの後、七夕ということで短冊の飾り付けをしました。特に今回は留学生にも参加していただいたため日本の文

浴衣着付け教室の開催の案が出たのは2年前の夏でした。当時「日本の伝統文化を知る」というテーマで折り紙教室を開催した後だったため、同じ日本の文化につながる浴衣着付け教室を提案しました。2024年度から学生部会メンバーも増え、新体制一発目のイベントとして開催することになりました。みなとみらいキャンパスの1階には七夕の時期になると笹の葉に短冊が飾られるので浴衣と合わせて日本の七夕文化を体験してもらおう機会にしたいと考えました。



七夕飾りを楽しむ様子



笹に短冊を飾っている写真



着付けをしている様子



浴衣を選ぶ様子

着るために今回の教室に参加した講師の方々には説明やアドバイスも加えながら着付けを指導してくれました。そのため、日本人も留学生も浴衣を着てみようと思える教室になったと思います。



着付け直後の記念写真

化を感じていただけたのではないかと思います。着付け体験では特に帯を結ぶ工程に苦戦していました。あちらこちらで講師の方やスタッフを呼ぶ声が聞こえており、講師の方々が見えなくて巻き手伝いをしてくれました。参加した留学生からは「お祭りで浴衣を

感想

◆ 今回念願だった浴衣着付け体験を開催できたこと、参加者の半数が留学生だったことなど学生部会メンバーとして大変うれしく思います。神奈川県大学の事務や保健室で働かれている方を講師としてお迎えし、サポートとして人文学会事務の方々にご協力いただき、浴衣着付け体験を開催することができました。参加者の中には浴衣を着たことがない人もたくさんいたため、今回の教室が浴衣に興味を持つきっかけとなることを願います。また七夕ということで国際センターの短冊飾りに参加しました。浴衣を着て短冊を飾ることで、参加者はより日本の伝統文化を感じる事ができたのではないのでしょうか。それぞれが願いを書いた短冊を飾ってそれが叶うことを期待しています。

神奈川県人文学会学生部会は学生による自主的な活動を行う団体です。ご興味がある方は是非ご参加ください。

神奈川県人文学会 学生部会
[http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/
student/index.html](http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/student/index.html)
jinbun-staff@kanagawa-u.ac.jp



友人5人で楽しんでいる様子



参加者同士の交流



講師の先生方との記念写真

おすすめのアニ메이션映画

学生部会のメンバーがおすすめのアニメ映画を紹介します！
気になる映画があったらぜひ観てみてください。

国際日本学部 国際文化交流学科1年 大沼花

すずめの戸締まり (2022年公開)

監督 新海誠

キャスト 原菜乃華、松村北斗、深津絵里、
神木隆之介

あらすじ

九州で暮らす17歳の少女・鈴芽(すずめ)は、扉を探しているという青年に出会う。彼を追ったすずめは、山中の廃墟にある不思議な扉に遭遇する。この扉は「向こう側」から災いがやってきてしまうため、戸締まりをしなくてはならないと言ふ。やがて、日本各地にある扉が開き始め、すずめは扉を閉める旅に出ることになる。

この物語は、日本各地の廃墟を舞台に、災いの元となる扉を閉めていく少女・すずめの成長を描く冒険物語だ。私は、物語のストーリー性と、映像美に魅力を感じた。私たちが普段みている日本の風景と、地震という日本人に身近な存在を描いているため、物語に惹き込まれる。

ありふれた日常の大切さと未来へ力強く歩いていくことを教えてくれる作品だ。

映画『すずめの戸締まり』公式サイト

<https://search.app/TWytEuAmfD4wm7r>

外国語学部 中国語学科3年 内田佳澄

五等分の花嫁 (2022年公開)

監督 神保昌登

キャスト 松岡禎丞、花澤香菜、竹達彩奈、
伊藤美来、佐倉綾音、水瀬いのり

あらすじ

落第寸前で勉強嫌いの五つ子を家庭教師として卒業まで導く主人公・風太郎は、努力が実を結び、無事高校三年生になった。「学園祭」にむけて張り切る四葉、女優業に専念するため休学することになった一花、大学受験のために一生懸命勉強する五月、自分を変えるために奮闘する三玖、姉妹のために父親を学園祭に招待しようとする二乃。風太郎は五つ子と共に過ごす中で彼女たちに対する気持ちの答えを探す。五つ子と風太郎のラブコメディを描いた「五等分の花嫁」の完結編。

この映画は「五等分の花嫁」の完結編です。アニメ1期、2期の続編です。この作品は、誰が花嫁かが最後まで伏せられていて、五つ子それぞれに魅力があり、作画もとても良いです。個人的には、アニメ本編か原作を見てから見るのがおすすめです。今作やアニメは様々なプラットフォームで配信されています。今年の9月にも新作映画が公開されます。

本編は、「学園祭」が舞台となり、各々の悩みや感

情が丁寧に描写されています。休学している長女・一花も学内外問わず登場しており、ヒロインの登場回数

の偏りはほとんどありません。学園祭の後、風太郎が姉妹を呼び出して花嫁が確定するシーンはこの物語最大の見せ場で、とてもハラハラします。アニメや原作の後に見れば、学園祭という舞台装置を介して、風太郎と姉妹の成長が丁寧に映像化されていることが分かるようになっていきます。

ラブコメディとしてだけではなく、姉妹の頑張りや成長を見守ることもできるアニメです。現実には疲れたときに、かわいい五つ子のやりとりを眺めるのもいいと思います。

<https://www.tbs.co.jp/anime/shanayome/movie/>

外国語学部 中国語学科4年 橋口京佳

サマーウォーズ (2009年)

監督 細田守

キャスト 神木隆之介、桜庭ななみ、宮司純子、
谷村美月

あらすじ

高校2年生の小磯健二は憧れの先輩篠原夏希から婚約者のフリをして親戚の集まりに参加するバイトに誘われる。夏希の親戚が集う中、健二にインターネット上の仮想世界・OZ(オズ)からメールで暗号が届き、数学が得意な健二はそれを回答



してしまい、翌日健二のアバターはラブマシーンと呼ばれるAIに乗っ取られた。おばあちゃんの死をきっかけに現実世界を混乱に陥れたラブマシーンから世界を救うため、夏希の家族と健二は自分にできることから一人一人が行動して闘いを挑むのだ。

この作品はシンプルに夏や田舎の雰囲気を感じたい人も、家族の絆や温かさを感じたい人、アクションシーンが好きな人にもおすすりできる作品で、夏にぜひ見て欲しい作品となっている。

<https://s-wars.jp/special/wallpaper.html>

外国語学部 中国語学科1年 山本 奈津希

つみきのいえ (2008年)

監督 加藤久仁生

あらすじ

年々海面が上昇し水没していく街に、一人の老人が住んでいた。彼は家が水没する度に、家をつみきのように積み上げながら暮らしていた。そんなある日、彼のお気に入りだったパイプを海中に落としてしまう。下の階へパイプを拾いに行くことをきっかけに、彼の人生を振り返る物語。

この映画は第81回アカデミー賞短編アニメ賞を受賞するなど高い評価を得ている。台詞が無く映像とBGMだけで話が進められるが、映像だけで家族との思い出やおじいさんの心情を十分感じ取ることができる。この家の下の階は当時のまま残っているの、思い出が保管されたアルバムのような家になっている

る。家は長く住むことで内装が変化したり引越したりする人が多い場所だが、おじいさんの家では思い出に直接触れられるというところが羨ましく思う。上映時間は12分と短いがおじいさんと家族の思い出が詰まった心温まる映画。

外国語学部 中国語学科4年 小林 琉夏

劇場版 名探偵コナン 緋色の弾丸 (2021年)

監督 永岡智佳

原作 青山剛昌

キャスト 高山みなみ、池田秀一、置鮎龍太郎

日高のり子、森川智之

あらすじ

世界最大のスポーツの祭典「WSGワールド・スポーツ・ゲームス」の記念すべき東京開催を迎えようとしている日本。その開会式に合わせて、日本の技術を総集した、最高時速1,000kmを誇る「真空超電導リニア」が新名古屋駅と東京に新設される芝浜駅間に開通することが発表された。世界からの注目を集める中、名だたる大会スポンサーが集うパーティー会場で突如事件が発生！

企業のトップが相次いで拉致されてしまう異常事態に。その裏には事件を監視する赤井秀一の姿、そして赤井からの指令を待つFBIの姿があった。

この映画ではぜひ赤井ファミリーに注目してもらいたい。FBIの赤井秀一、プロ棋士の羽田秀吉、女子高中生で探偵の世良真純、そして三人の母親のメアリー

によって事件は解決へと向かう。普段それぞれ別の場所活躍している兄弟が自分の能力を活かし立ち向かう姿が印象的である。

<https://bzzone.co.jp/coman/cp2020/index.html#story>

国際日本学部 国際文化交流学科3年 坂野 文音

金の国水の国 (2023年)

監督 渡邊こと乃

キャスト 賀来賢人、浜辺美波、戸田恵子、

神谷浩史、茶風林、てらそままさき、

銀河万丈、木村昴、丸山壮史、

沢城みゆき

あらすじ

物語の舞台は隣接する金の国と水の国と呼ばれる王国。二カ国は長い間対立関係にあり、今にも戦争を始めようとしている。そんな中、二カ国の王女と賢者が出会い、愛する人を守るために戦争を止めようと奮闘する物語である。

この映画の見どころは、二人が惹かれていく中で、大切なことに気づかせてくれる点である。例えば、それぞれの国民が持つ偏見を超えて、お互いを知る中で惹かれていく二人の姿から、人と関わることの大切さを学ぶことができる。このように、二人の相手を思う温かい心は、人と深く関わるのが少なくなりつつある私たちに大切なことを教えてくれる。優しい心に触れたい人、現実に疲れてしまった人にぜひ見てほしい作品である。

<https://www.warmebros.co.jp/kinokuni-mizu>
nokuni-movie/



神奈川大学民俗学研究会のこれまでの歩み

神奈川大学民俗学研究会

「神奈川大学民俗学研究会」（以下、神大民俗）は、令和2（2020）年に新設された国際日本学部歴史民俗学科の学生によって、令和3（2021）年に結成された研究会です。

神大民俗を設立した当時は、まさにコロナ禍の深刻化が加速していた時期でした。歴史民俗学科においては、同級生や先生方との交流の場を十分に得ることが叶わず、入校規則や外出自粛により歴史学・民俗学ともに欠かすことのできないフィールドワークを行えない状況も続き、学生生活・勉学ともに様々な影響を受けてきました。しかし、「（コロナだから）を理由に何事も諦めてしまうのはもったいない」という考えから、新設の学部学科であるという背景も相まって、学生主体の研究会の設立へと至りました。

神大民俗は実に様々な活動に取り組んでおり、その詳細は後半で紹介させていただきますが、研究会設立当初から意識しているのは、

- ① 講義で学んだ知識のアウトプットを行うことで、そこから共同研究や企画を練る
- ② 学生や先生方との交流の機会を生み出すことで、学年を越えた関係性の構築を目指す
- ③ 年に一度、学生の調査報告やコラム等を掲載する会誌『神大民俗』を刊行することで、学生同士で学びを高め合い、編集・推敲作業に参加することで様々な経験を得られる場とする
- ④ 学科の学びの（その先）を見据える

という4点です。この4点を研究会の基盤として築き続け、活動4年目を迎える現在では、歴史民俗学科の1年生から4年生をはじめ、同学部日本文化学科の学生の参加もみられるようになり、活動によっては分野横断的な参加者の集まりが増えました。また、今年度は研究会員3名が神奈川大学院歴史民俗資料学研究所博士前期課程に所属していることから、今後はさらに参加者の多様な所属やそれに伴う活動の幅の広がりがみられると予測しています。

先に記したように、神大民俗の活動の幅は年々広がりを見せています。ここでは一つ一つの活動の詳細な説明は割愛しますが、全ての活動の記録は会誌『神大民俗』（創刊号から第3号をPDFで公開中）やweb記事「note」にまとめていますので、そちらを参照していただければと思います。簡単にこれまでの活動概要を示しますと、初年は江戸時代に隆盛した「つくりもの」文化によって庶民の手から生み出された疫病に対峙する神様「麦殿大明神」に関する共同研究を行い、活動のなかでは実際に竹細工を用いてコロナ禍版の麦殿大明神をみなどみらいキャンパスに迎え入れました。続いて2年目・3年目は、横浜キャンパスの最寄りである白楽駅周辺に広がる「六角橋商店街」にてフィールドワークを実施し、六角橋商店街の歴史をはじめ、現在お店を構えている店主やお客さんへの聞き書き調査からライフストーリーの報告を行いました。また、3年目は「民具（昔の人々、または私たちの生

活を支えてきた、支えているモノ）」と「デジタルファブリケーション」の連関を示す企画に挑戦し、経営学部の先生やフアラボみなどみらいのスタッフの方々との共同によって、民具を描いたアクリルキーホルダーを景品とした「民具ガチャ」の展示を夏のオープンキャンパスにて実施しました。

そのなかでも、六角橋商店街の調査、通称「六角橋民俗」は様々な成果を得られた共同研究であったと捉えています。研究会設立時の指針の2つ目を体現するために、夏休み期間を利用したフィールドワークの際には、異なる学年の学生同士で2人一組のペアをつくり聞き書きに出ました。最初はペア内でも緊張した雰囲気を感じられましたが、横浜キャンパスの図書館でのまとめ作業の際には、どのペアからも和やかな雰囲気が見て取れました。コロナ禍ということもあり、これまで学年の垣根を越えた交流があまり見られなかった本学科ですが、こうした学生有志の調査の場において学生が協力し合い、時には他愛もない話で盛り上がることもできたことは、良い成果であったと思います。そして、普段何気なく通り過ぎてしまう六角橋商店街の歴史、ならびに店主のライフストーリーやお客さんとの交流の在り方を聞き書き調査によって知ることができた点は、実際に町に出て調査を行う共同研究の醍醐味であったと考えています。なお、調査を終えての考察では参加者によって多様な意見が見受けられましたが、その全体は会誌に掲載していることから、こ

ここでは一部抜粋しながら参加者の様子をお伝えできればと思います。

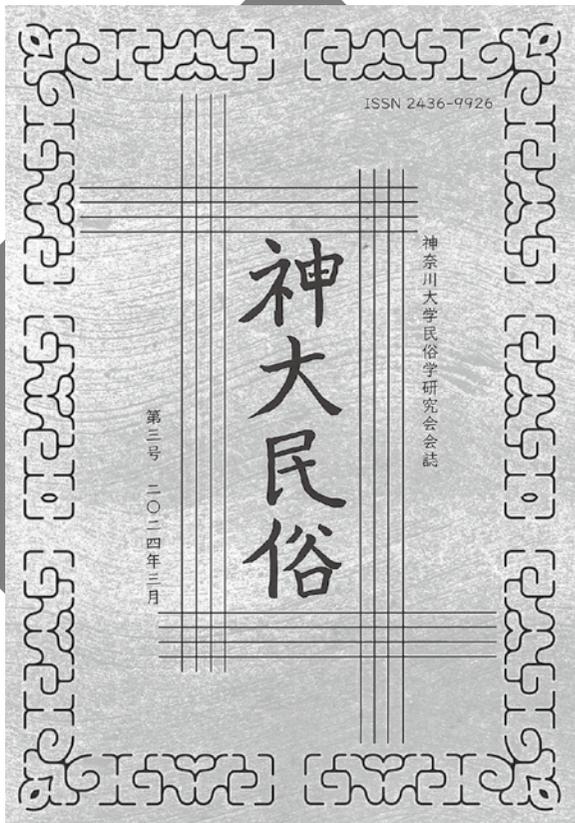
当時歴史民俗学科2年生であった学生は、「六角橋商店街に昔からお店を構える店主さん」にお話を聞き、その調査を通じて「昔からあるお店に共通する」とは、「六角橋商店街の中で愛されている」ということ「であったと述べています。調査時もお客さんがお店を訪れる場面に何度か遭遇し、「店主さんとお客さんの距離が近く、他愛もない会話を交えながら接していたことが印象的であった」といい、「お店の人とお客さんが信頼しあっていることも知ることができた」ようです。こうした気づきから、この学生は「近年、六角橋商店街では物を売る小売店が減り、飲食店ではお店の入れ替えが激しい状態であり、つい数ヶ月前に開店したお店が潰れてしまうことも多くある。その中でも昔からあるお店は今でも地域住民と強い関係を結びながら営業を続けている。調査したお店は、お客さんに愛されながら現在でも営業を続け、お客さんとの「信頼関係」が深いお店である。そして、六角橋商店街では今でもお客さんとの深い「信頼関係」をみせるお店が多く存在しているのである。そのようなお店は簡単になくなることはなく、地域住民に愛され続けるだろう。」という考察を導き、「店主さんの温かさ」は「時代は変化しても人との関係性、結びつきは変わらない」ということを私達に示してくれている」と六角橋商店街ならではの地域性を考察しています。

このように、神大民俗における様々な活動は、単に学部学科の講義の延長ではなく、時には神大民俗での活動が講義の糧になる可能性を秘めています。また、昨年度の「民具ガチャ」企画のように、学部学科の講義だけでは体験できないような調査も行うことができ

るため、今後も様々な可能性を有している研究会であるはずで。今後もnoteや会誌を通じて我々の活動を発信し続けていきますので、ぜひご声援いただけますと幸いです。

神奈川大学民俗学研究会note

https://note.com/jindai_folklore/



かながわユースフォーラム2024を終えて

2024年7月13日土曜日に「かながわユースフォーラム2024」が開催されました。今年で五年目を迎えるユースフォーラム。開催に至るまでの経緯や当日の様子など、たっぷりご紹介します。

かながわユースフォーラムとは

「かながわユースフォーラム」は、「地域活動へのハードルを下げたい」との思いから、社会教育課程履修者8人が2020年に立ち上げた「若者企画型交流事業」です。私たちはこの事業の「参加者」として、先輩方の後を引き継ぎ計画立案に関わってきました。そして、「参加者」である潜在的ボランティア（ボランティアをしたくてもできない）層の学生たちをター



ゲットにしてユースフォーラムを開催し、地域にある様々な課題について関心を持つてもらうこと、解決のために活動を行っている学生たちの成果発表や、活動への自発的参加を促すことを目的としています。

かながわユースフォーラム2024

「かながわユースフォーラム2024」のテーマは〈育てよう未来への種〉でした。このテーマには、これまでのかながわユースフォーラムで、先輩方が作ってきたくださった繋がりをより深めていくことや、若者の継続的な社会参加を推し進めるという決意が込められています。

「参加者」として、地域デザイン演習Ⅳ（社会教育



課程)を履修している学生を中心に4年生や院生の学生サポーターを加え、今年度は36名が実行委員として運営に携わりました。また、当日は「子育て支援」(社教)「多文化交流」(社教「防災×地域」)「オレオレ詐欺」(「ジェンダー」)「海外ボランティア」(中学生むけ学生ボランティア)(教職)の7つの分科会(スタッフ58名)と、捜真女学校高等学校や横浜市立東高等学校などの高校生を加え、計14団体のパネル展示が行われ、参加者は来客の方(32名)を含め268名とな

国際日本学部 日本文化学科3年 中山彩香
人間科学部 人間科学科3年 三田村捺希



り、多くの方々が会場に足を運んでくださいました。

開催当日までの間、私たちは授業以外にもグループごとに集まり、何度も話し合いを重ねました。振り返ってみると、実行委員会の全員が少しでも良い「かながわユースフォーラム2024」にするために、寝る間も惜しんで必死になった半年間でした。

高校生活という青春時代をコロナ禍によって奪われた私たちは、友達作り方も、初対面の人との話し方も忘れ、人間関係が希薄になってしまっていたように思います。そのため、自分の中にある本音もなかなか他人に伝えられずにいましたが、この半年間、グループ内だけでなく地域の方々や先輩方、先生方とたくさん話をし、ぶつかり合い、励まし合ったことで、自身の内面と再び向き合うことができました。

国境を越えて輪を広げよう!

— 多文化交流会 —

最後に、私たちがこれまで行ってきた活動についてご紹介します。

私たちは、外国にルーツのある子どもたちの多くが、自分の意思とは関係なく両親の仕事の都合などの外的要因から、日本に「連れてこられてしまっている」現状に着目し、子どもたちが抱える困難や課題に寄り添いたい、少しでも日本に来てよかったと思ってもらえるような取り組みをしたいと考えました。子どもたちが大学生と一緒に遊ぶ中で、学校と家とも違う居場所作り、斜めの関係作りができたかと思っています。

そこで、今年の3月から「神奈川県多文化共生ラウンジ」や「友ゆうスペース」に足を運び、外国にルー

ツのある子どもたちとの交流を深めてきました。また、5月と6月に一回ずつ、多文化交流会としてレクリエーションイベントを開催し、そこで感じたこと、考えたことをもとに、「外国にルーツのある子どもたちに何ができるのか」について考える分科会をかながわユースフォーラム2024内で行いました。

参加者からは、「外国にルーツのある子どもたちと関わってみようと思った」という声がかかれた一方で、「子どもたちに対して大学生にできることはないか、考えるのが難しかった」という声もありました。

まだまだ、大学生にとって手が届きにくい課題という認識があるようですが、新学期からは多文化交流に関心のある学生と共に活動を続けていきたいと思いません。

鶴見国際交流ラウンジ訪問記

— 多文化共生のまちづくり

外国語学部 スペイン語学科4年
新垣玲奈、齋藤りん、丸屋凜奈

横浜市鶴見区は、市内で二番目に外国人人口が多い区であり、現在では区民の約二〇人に一人が外国人である。多様な人々が共存するこの地域では、多文化共生社会を推進させる取り組みが数多く行われている。二〇二四年七月三日、私たちは鶴見駅から徒歩約二分のシークレイン二階にある「鶴見国際交流ラウンジ」を訪れ、五代目館長の小林広子さんと学習支援コーディネーターの工藤文子さんへ取材を行った。この記事を通して、多文化共生の重要性についてさらに意識を高めていただけると幸いである。

鶴見国際交流ラウンジについて

二〇一〇年に横浜市国際交流協会（YOKE）によって設立。ラウンジ運営事業と多文化共生の地域づくり事業の二つに分かれる。学習支援事業（外国につながる子どもたち向けの学習支援教室運営等）にも力を入れている。鶴見区の「多文化共生のまちづくり宣言」のもと、多文化共生の地域づくりを行っている。現在、一六人のスタッフによって構成されており、外国人スタッフの中には日本での子育ての経験を持つ者もいるため、利用者にはリアルな情報提供やサポートを得ることができる。



鶴見国際交流ラウンジ入口

学習支援施設としてのラウンジ

● 日本語教室
六つのボランティア団体によって開催されており、教室によって内容も様々である。初級から中級までレベル別の教室や、水曜日の夜に行われる日系中南米のための教室、ほかにも希望によってはマンツーマン指導も受けることができ、それぞれの目的や都合によって選択することが可能になっている。

● 日本語ボランティア向けの講座

多文化共生に長けた講師などを招いて、日本語ボランティアの育成講座や外国につながる子どもへの学習支援のスキルを学べる講座を開講している。

● 外国人親子カンガルーサロン

赤ちゃんを連れて参加可能な日本語教室や生活ガイドダンスを提供。地域の子育てサロンなどへアウトリーチをし、外国につながる親子と日本人親子の交流の場を作るサポートなどを行っている。また区内の公共施設、学校、エスニック料理店などの情報と利用方法をやさしい日本語や多言語で知ることができる「子育てつながりマップ」も提供している。

● 学習支援教室

外国につながる子どもたちの学校の勉強をサポートする場であり、小学生は月二回の「あおぞら教室」、中学生は週一回の「なないろ教室」に参加することができる。夏休み宿題教室や中学三年生入試対策クラスも設置している。

国際理解の場としてのラウンジ

年に一度の「多文化共生フェスタ」の開催や、地域イベントへの参加等をする中で、外国人と日本人がお互いの文化を知り、多文化理解、そして多文化共生を発展させる役割を果たしている。二〇二四年一月一六日（土）にはネパールをテーマとした多文化共生フェスタを開催予定だそう。

◎ なぜ鶴見でラウンジを始めたのか

「A」鶴見は元々南米の人が多くということもあり、多文化共生に関して、ほかの区と比べても昔から先んじて盛んに取り組んできたという歴史があります。二〇一〇年にラウンジが開館されるまでは、鶴見区役所内で日本語教室を開催していました。その後、鶴見駅東口の再開発事業として大型複合施設シークレインが建つときに、鶴見区国際交流事業推進委員会で有識者、区民の方々の意見などを取り入れながら作り上げました。横浜市国際交流協会（YOKE）が鶴見区の委託を受けて設立されたラウンジは、鶴見の他にも中区と南区にもあり、鶴見は三つめになります。



壁：子育てサロンなどのポスター、写真下の棚：ドリルやカルタなどの学習セット

◎どのような子どもたちがラウンジを利用するのか

▲ラウンジの設立当初、近隣の鶴見小学校や鶴見中学校からは中国につながるのがある子どもたち、潮田地区からは南米の子どもたちが多く通っていました。しかし、近年は中国ルート、南米ルートの他、区内のもっと遠くの学校からもネパールやベトナム、インドなど色々な国の子どもたちが勉強しに来ており、多様性が進んでいると思います。また、新規に来日する子どもがどんどん増えています。ラウンジ内の相談窓口の前に置かれている机では自習学習が可能です。そこでは外国につながるのがある子どもたちが教材を持参、もしくはラウンジに置かれている教材を使って自習するためにラウンジを利用する子どもがいます。この自習スペースで熱心に勉強を続け、大学受験に合格した子どももいます。



ラウンジ内にある教室のひとつ

◎ラウンジで働くやりがい

▲工藤さん：子どもと関わる事ができる仕事はやりがいがあり、素敵なことです。子どもたちは、勉強していつまらないと本当につまらない顔をし、分かっていた時には顔を輝かせます。子どもたちの表情が正直に分かるところが楽しいです。また、学校で日本語が分からず我慢している場面が多くあると思うので、教室では少しでも楽しいと思える時間があつたらいいなと思います。

▲小林さん：三年前に鶴見国際交流ラウンジを運営し

ている横浜市国際交流協会（YOKE）に入職したタ イミングで館長になりましたが、多文化共生は横浜市 だけではなく全国的に必要とされている取り組みなの で、そこに実際に携われることはとてもうれしいこと だと思っています。以前、短期間だけインドネシアに いたこともあったため、マイノリティーとして経験し たことを鶴見国際交流ラウンジで生かせればよいと 思っていました。外国の方が来た時にはその気持ちを 持ちながら接するようにしています。このような経験 を生かせる部分にやりがいを感じています。

◎ほかの団体や学校との関わりについて

▲神奈川県とは、二〇一二年から「国際協力研修講 座」という講義を通じて関わるようになりました。神 奈川大学のスペイン語学科が一番交流の歴史が長いで す。多文化共生の実施の場として選んでくださってい ると思うのですが、毎年学生さんを教室に送ってくだ さりとても助かっています。他にも連携している団体 は多くあります。区内の小中学校や高校、大学、社会 福祉協議会との連携が多 いです。地域ケアプラザ というのもいくつかあ り、そこには子育てサロ ンがあるので、外国の親 子向けのイベントを一緒 に考える際によく連携し ています。



スペイン語の絵本と英語の絵本

◎鶴見国際交流ラウンジへの問い合わせについて

▲ラウンジでは、幅広い相談を受けています。その中 でも特に、日本語を習いたい方が一番多いです。例え

ば、先に日本に来て

いたお父さんからの 「後から来た奥さん と子どもに日本語を 習わせたい」という 相談です。子どもを どの学校に通わせる か、という相談や保 育園についての相談 もかなりあります。その際には、相談した方に保育園 の入園条件を伝え、書類の手伝いをしています。また、 行政から届く様々なお知らせをラウンジのスタッフが 読み、その内容を伝えたりもします。



学校・仕事・子育てなど 情報ごとに分けられた資料棚

◎支援する上で問題だと感じる点について

▲土曜の小学生クラスは、子どもたちには（特に低学 年の子どもは）保護者に連れられてやって来ます。しか し、支援が必要な子の中には、親御さんの仕事や、家 からのアクセスの問題などのため、教室に来られない 子どももいるだろうと思います。そのため鶴見国際交 流ラウンジで勉強をしている子どもたちは、とても恵 まれていると思います。また、外国につながる子ども と言えば、日本の学校での学習に苦労しているイメー ジがあつたのですが、最近では、経済的に恵まれており、 母国でも成績が良かった子がバリバリ勉強し、塾にも 通い、その上で無料なので当教室にもやってくる中国 の子どもたちも見られるようになり、大きな学力の差 を感じます。本来ここは学校の勉強に困っている子の ための学習支援教室なので、最近では、塾の勉強は見 ることができないと断る場合も増えてきました。

◎ 外国のつながりがある子どもたちに高校受験はどのように行われているのか

▲ 外国につながる子どもたちにとって大きなハードルは高校受験です。たとえ中学生になって来日して日本語が全然分からない生徒であっても、日本語による入学試験を突破しなければ高校生にはなれません。受験の仕組みを知ることや、高校を選ぶことも、外国の家庭にとっては大変なことです。日本では、高校卒業の資格がないと働き口を見つけることがより難しくなるため、とにかく頑張って高校を卒業してほしいと思っています。神奈川県は来日直後の児童の状況を考慮し、在県外国人特別募集（外国人の人だけを募集する枠 全日制・一六、定時制・四）を行っています。この募集により、来日してから受験を受ける年の二月一日時点で通算六年以内の児童は、日本人の生徒と競争することなく入試を受けることができます。神奈川県は全国でも外国人枠が多い、恵まれた県です。また、在県枠を持つ高校は、入学してからも様々な支援が用意されている場合が多いです。

◎ ラウンジの今後の方針／課題はどのようなものがあるか

▲ 子育て世代だけでなく、高齢者支援にも焦点を当てた多文化多世代の機能強化事業を進める方針です。課題としては、横浜市に在住する外国の方に向けた情報発信が挙げられます。鶴見ラウンジが主催するイベント等に外国の方がなかなか集まり



七夕の短冊

にくいです。どのツールを使用し、どのタイミングで発信すればより多くの外国の方に届けられるか、工夫する必要があります。そこで、七月一日からラウンジのニュースを閲覧しやすいようにBlogで作成し、リンクを公式LINEで一斉に送信しました。これからは、日本語以外の言語で情報を発信するように検討していきたいです。

ラウンジへのインタビューを終えて

今回インタビューをさせていただいた工藤さんとは、鶴見区内の潮田小学校で行われている「つるみーによ」という、外国につながる子どもたちの宿題をサポートする教室にボランティアとして以前からお世話になっていました。潮田小学校は私の母校であり、通っていた当時から外国につながる生徒が多く在籍していましたが、現在ほどではなく、かつ日系中南米の子がほとんどでした。そのため今回のインタビューで「最近では中国やベトナム、ネパールなどのアジア圏からの生徒が増えている」と聞き、さらに国際化したなど驚いたと同時に、確かにつるみーに参加している児童にもさまざまな国の子がいるな、と感じました。このような多文化共生の社会が成り立っているのは、ラウンジの皆さんのサポートがあつてこそだと思います。そのため、ボランティアや今回のインタビューを通じて、少しでもその協力ができたことを嬉しく思います。

(新垣 玲奈)

私もつるみーによるボランティアに参加させていただいております。私がこのボランティア活動に参加するようになったのは、今回インタビューで一緒になっ

た新垣さんから誘っていただいたからです。少しでもお役に立ちたいと思い参加を決めました。小林さんと工藤さんがインタビューのなかで、多くの人にラウンジの情報を届ける必要があるとおっしゃっており、まさにその通りだなと感じました。私はつるみーによについて新垣さんからお話を伺わなければ、知る機会はなかったと思っています。そこで、今回のインタビューをきっかけに多くの人に鶴見国際交流ラウンジを知ってもらい、そしてラウンジが発信している情報の拡散につながればと思います。

(齋藤りん)

今回、インタビューをさせていただいた工藤さんと小林さんとは、昨年前期の「国際協力研修講座」という講義での鶴見国際交流ラウンジ研修でお世話になりました。夏季休業時に行われた研修で、海外国籍にルーツを持つさまざまな境遇の子どもたちに学習指導を行いました。私は、ボリビアの中学生の男子と中国の女子に数学を教えたり、ネパール人の中学生の女子の日本語ドリルを添削したりしました。彼らと交流したことで、勉強を教えることの楽しさ、やりがいも感じながら、またいろいろな国にルーツを持つ子どもたちに接することでそれぞれの国の文化を持つ個性も知り、とても貴重な経験となりました。また、今回のインタビューを通じて、子どもと関わることでできる仕事はやりがいがあると感じました。

(丸屋 凜奈)



インタビュー後の集合写真
(写真中央・工藤文子さん、右・小林広子さん)

鶴見国際交流ラウンジ紹介

人文学研究科 欧米言語文化専攻 博士前期1年 曹黄個

私は、鶴見国際交流ラウンジ(以下、鶴見ラウンジ)で一年半働いた。最初ラウンジを知ったのは、鶴見区にある横浜市国際学生会館(以下、学生会館)に住んでいたころ。当時、学生会館の窓口スタッフから、「ラウンジで働いてみませんか?」と声をかけられた。なぜ学生会館のスタッフとラウンジがつながっているのか。それは、この2つの施設とも「YOKKE」が運営しているからだ。「YOKKE」とは、横浜市国際交流協会(以下、英文名「YOKOHAMA ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL COMMUNICATIONS AND EXCHANGES」)の中か「YOKOHAMA'S "YOK"とEXCHANGES」の「E」を合成してつけた愛称だ。横浜市と世界の「きずな」を強くしようという気持ちで、「ヨーク」と呼んでいる。他の国際ラウンジと日本語学習支援センターもあるが、今回は鶴見ラウンジと学生会館に焦点を当てて紹介したいと思う。

私が学生会館に入居したのは2022年の4月であった。これは神奈川大学を通じて学生会館に申請したのがきっかけだ。学生会館は主に留学生の受け入れ場所として運営されている。ここでは、毎月留学生同士が交流し、各国の文化を紹介する活動がよく行われている。また、日本語の勉強を手助けするためのサポート事業や、卒業生の就職活動を支援する事業もある。さらに、学生会館を通じて横浜市内の小中学校や社会団体などにつながる機会も豊富にある。私自身も出前授業で小学校に行ったり、社会団体の要望に応じて自

分の故郷の紹介をしたこともあった。そんな充実した生活の中で、ラウンジで働く機会をもらった。ラウンジは多文化共生というテーマで運営されているが、私の仕事は主に在住外国人を支援することである。具体的には三つの業務がある。一つ目は外国人向けの日本語教室案内である。もし外国の方がラウンジに来て日本語を勉強したいと相談した場合、私はラウンジで活動している日本語団体を紹介し、彼らを日本語の先生に繋ぎ、適切な時間帯を案内する。もし彼らが全く日本語を話せない

ため、彼らをマッチングして、適したボランティアを派遣する。区役所や保育園へ派遣する場合もよくある。最後に私の感想をひと言述べたい。皆さんご存知の通り、日本社会は少子化と高齢化が進行している一方で、若い外国人がますます増えている。日本人と外国人の衝突か共生か、これは質問ではなく、選択である。この中でラウンジのような組織は重要な役割を果たしていると思っ

場合、私は中国語と英語に限って通訳をする。他のスタッフはスペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、ネパール語などで対応する。二つ目は、研修室の予約を管理することである。日本語教室は外部の団体によって運営されているため、時間帯の調整することも重要だ。最後は横浜市内の小中学校に在学する外国人の子どもたちを支援することだ。「YOKKE」のデータベースには多くの語学ボランティアが登録されている



ラウンジのイベント準備中

山の頂上から見上げる台北 101 の足元

台北101は街のシンボル。街の中でいかにも存在感のある台湾一の超高層ビル101は実際に展望台に登って台北の夜景を一望することが可能。だが私はどうしても101と一体化する台北の夜景のシャッターを切りたくて近くにある象山に登ったのだ。日が落ちて暗い中ひたすら階段を上りつづけて苦勞した先に広がる台北の景色と101は言葉に表せないほどの感動であった。

思わずシャッターを切らずにはいられないが、カメラには収まり切れないぐらいの美しさは実際に足を運んで自分の目で確かめるべきだ。



象山から見る台北101 2023.3.17



四海豆浆大王 2024.3.17

朝から夜まで外食

台湾の食文化は日本と大きく異なる点がある。それは外食文化があることだ。台湾といえば夜市が立ち並ぶ姿を想像できるが、夜に負けないぐらいに朝から各地で朝食を待つ人で賑わっている（早饭）。そのため1日3外食で済ませる人がほとんどで、キッチンを持たない家庭も稀ではない。

早朝から列を作っている現場に私も参列して確かめたが、台湾朝食の安さと優しい味付けは人々の舌を虜にして、パワーを与える理由が分かった。

台湾大のメインストリート

最後に今回最大の目的である語学勉強を果たした台湾大学。敷地内にある中心の大通りは台湾大学のメインストリートだ。

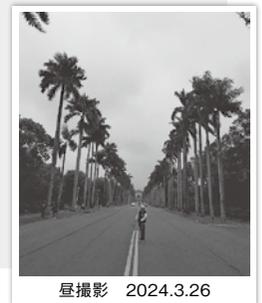
留学生生活最終日の前夜に友人と大学を訪れて敷地内をひたすら散策して語り明かした思い出が浮かび上がる。

台湾大の敷地面積はとて大きく、東京ドーム約4個半の広さである。またこの開放的な敷地は一般の人のランニングコースやお散歩の一環、撮影地や結婚式としても使用されるのだ。なんとと言っても正門をくぐり抜けた先の両側にずらっと立ち並ぶ椰子の木の迫力が言葉に表せない。ライトアップされた椰子の木はより一層迫力を増し、同時に私たちに安らぎも与えたのだ。



夜撮影 2024.3.25

台湾国立大学



昼撮影 2024.3.26

今回は私が台湾で特に印象に残った写真のほんの一部をご紹介しますが、写真には残せなかった台湾人の温かさや、台湾文化への関心などのエピソードが数知れずある。

私の写真を見てみなさんにもぜひ足を運んで自分の目で確かめてきていただきたい。



左から十份、九份にて父撮影 2024.3.23



父から譲り受けた実際のカメラ (Leica D-LUX6)

普段から仕事でカメラを構えることが多い父の影響を受けて写真撮影に興味を持った私。

父から突然「これから色々な景色をたくさん撮って」と愛用のカメラを受託された。

これ以降どこに行くにしてもこのカメラを手放せなく、何気ない一瞬のシャッターを切る。



今回の留学生生活を通して私が見たものの全てを写真に収めることはできなかったが、心の中のアルバムにしまっている。

これからの人生もこのカメラと共に様々な景色のシャッターを切っていこう。

台湾日記

—台湾でシャッターを切る

外国語学部 中国語学科3年
近藤 琉華

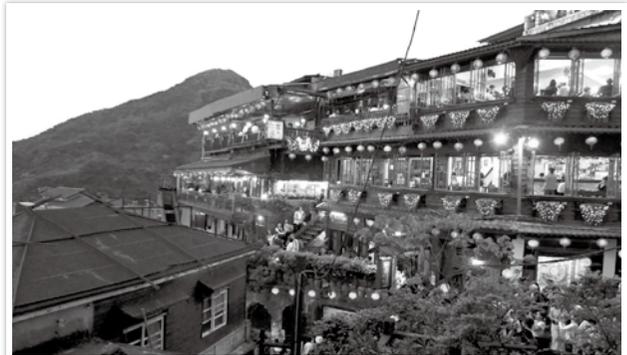
私は2024年の3月6日から約3週間、台湾の首都台北市にある国立台湾大学に語学研修に行ってきました。普段から写真を撮ることが好きな私は、父から譲り受けたカメラとともに台湾の様々な風景を写真に収めてきたので、今回はそのなかでも印象に残った九份、台湾路地、早飯、夜景、大学をご紹介します。

海に浮かぶ島々

この街並みにもとても魅力を感じたが、町の隙間から見える遠い海に浮かぶ島々にも感動した。まるで海と山の二つの地点からサインを送りあっているかのようだった。



九份老街から見える海の島々 2024.3.23



九份老街2024.3.23

灯で灯る山上の繁華街 九份

最寄り駅からバスで険しい山道を登る事20分、突然ひっそりと現れるこの小さな街はジブリ映画「千と千尋の神隠し」の舞台モデルとしてお馴染みの九份である。商店街の入り口から続く細い道の両脇には数々のお店が立ち並び、人々を引き付けるための売り出しを行っていた。観光客であふれかえるこの道をかき分けて進んだ先によく開けた景色にたどり着く。あまりの美しさに私もカメラを構え、シャッターを切ったが、この街の本番は五時を過ぎたあたりからだった。突然頭上に浮かび上がったいくつものランタンがこの街に華やかさをもたらし、私たちを赤く灯してくれたのだ。この景色を見るために人々は一苦労二苦労してまでも、ここに足を運びにくる。

アートチックな台湾路地

台湾の街並みはアート作品のようだ。カフェが集まる街には壁に絵が描かれていたりしているため、それぞれにコンセプトがあるみたいだ。

また日本に比べて街中に路地が多く、路地には四六時中バイクが停留している。バイクが道脇に立ち並ぶ姿は日本では見慣れない光景であるため路地と一体化する姿はとてもユニークである。どの路地のシャッターを切っても1つの作品であるかのようだ。

それから日が暮れ始めると突如道の両端を埋め尽くす屋台の数々。食をそそる香り、人で賑わう様子を見ると思わず引き寄せられてしまう。

色とりどりの看板には1つ1つテーマがあるかのようで個性を表現しているが、1つの画角でシャッターを切るとお祭りが感じられる。



中山 壁一面に描かれるアート 2024.3.17



中山路地 2024.3.23



寧夏夜市 2024.3.10

スペイン語スピーチコンテスト

外国語学部 スペイン語学科 岩崎賢

2024年6月27日(木)、神奈川県大学みなとみらいキャンパス米田吉盛記念講堂において、外国語学部スペイン語学科主催(後援: 神奈川県大学人文学会)のスペイン語スピーチコンテストが開催されました。このコンテストは主としてスペイン語学科の学生が様々なテーマについてスペイン語で発表しその実力を競うというもので、毎年、外国語学部文化ウィークの一環として開催されています。

このコンテストには2つのカテゴリー、すなわち Categoría A (詩や物語の暗唱) と Categoría B (特定テーマでの自作のスピーチ) があり、入賞者には賞状と副賞が与えられます。今年にはAには4名、Bには7名の参加がありました。

Aではパブロ・ネルーダやガルシア・ロルカなどの詩人たちの詩の暗唱がなされました。またBでは、日本における英語教育、ピカソの「ゲルニカ」、地球温暖化、など多様な社会的・文化的テーマで発表がなされ、その後には発表者と学科の教員や学生たちの間でスペイン語で質疑応答がなされました。たくさんの方の聴衆の面前で、ほどよい緊張感につつまれながらスペイン語で発表や質疑応答をすることは、参加した学生たちにとって貴重な経験になったようです。



入賞のタイトル

Categoría A

1位
Cuando se abre la mañana
(Federico García Lorca)

2位
Los sueños
(Antonio Machado)

Categoría B

1位
La situación de la enseñanza del inglés en Japón
日本の英語教育の状況

2位
Enganchados al móvil
スマホ依存症

3位
El futuro
未来について

審査員特別賞
Lo que podemos hacer para frenar el calentamiento global
地球温暖化を抑えるために私たちにできること

観客が選ぶ特別賞
Un aspecto interesante de la cultura española
スペイン文化の興味深い一面

入賞者の声

池田 夏鈴 Cuando se abre la mañana

スピーチコンテストで一年生にも関わらず賞をいただけで、大変嬉しいです。このコンテストには、スペイン語の良い練習の機会になればと思います、参加を決めました。コンテスト本番のためにアレハンドロ先生から詩の意味や発音、読み上げる際の抑揚やリズムについてご指導いただきました。今回、賞をいただけたのも、先生のご指導のおかげです。

私は「Cuando se abre la mañana」という詩の暗唱をしました。詩の意味や背景、雰囲気や伝わるように、詩を読む速度に緩急をつけ、抑揚が自然に感じられるように気をつけて練習しました。本番では緊張して早口にならないように、観客の顔を見ながらゆっくりと発音すること、リズムを崩さないようにすること、紙を捲る音に被らないようにすることを意識して発表しました。その甲斐あって、詩の意味がしっかりと伝わったと、先生方からお褒めの言葉をいただきました。このコンテストに参加したことで、スペイン語の能力はもちろん、人前で上手に話すための技術も向上したと思います。ありがとうございました。

関水 夕々々 Cuando se abre la mañana

私は今回のスピーチコンテストで、Categoría Aの詩の暗唱に参加しました。参加した理由は、自分の力を試してみたかったのと、単純に図書カードがほしい

かったからです。日々の練習や暗記は大変でしたが、同時に楽しくもありました。

スピーチコンテストに参加して良かったことは、想像していたよりも沢山ありました。たとえば、友達と一緒に参加できたのが嬉しかったり、スペイン語の詩を暗唱できるようになったり（かっこよくないですか？）、色んな人に褒めてもらえたり、嬉しくなることが様々ありました。

もし、次のスピーチコンテストに参加するか迷っている人がいたら、チャレンジしてみるのをおすすめします。やりきった後の達成感は格別ですよ。

山藤 英絵 La situación de la enseñanza del inglés en Japan

私は昨年留学した経験を活かし、今回のスピーチコンテストへの出場を決めました。テーマは自由に決めることができたので迷いましたが、自分が好きな分野について話をしたかと思ひ、言語教育に関するテーマを選びました。原稿を3分という規定の時間内に収めるのがなかなか難しく、思ったようにいかないこともありました。しかし添削してくださった先生方のアドバイスのおかげで、納得のいく内容に仕上げることができました。本番はたくさんの方の前で発表することが緊張もありましたが、スムーズに言葉が出てきたので練習の成果を感じることができました。

今回の経験を通し、自分のスペイン語能力の課題と改めて向き合うことができ、また大勢の人の前で話すという貴重な体験をさせていただきました。最後に、このような場を提供してくださったスペイン語学科の先生方に厚くお礼申し上げます。

謝莉里 Enganchados al moviil

今回初めてスピーチコンテストに参加したことは、私にとって大きな挑戦でした。スピーチコンテストの

練習期間にスペイン語の検定試験もあり、練習の時間を作るのが難しかったのですが、上手く隙間時間を使い練習に励むことができました。

練習では、発音、トーンの大きさ、どの部分を強調し、観客に表現するのが難しかったです。スピーチの終わりに質疑応答があったので、考えられる質問を想定し、対策をしました。当日は、とても緊張しましたが、いままで自分が練習してきたことをやるしかないという気持ちでなんとか最後までやり遂げ、質問にも答えることができました。

スピーチコンテストの内容は、多くの大学生が直面しているスマホ依存症について発表しました。これがみんなにスマホとの向き合い方を考えてもらうきっかけになれば、嬉しく思います。

スピーチコンテストの練習や質疑応答対策を沢山付き合ってくれた先生方と友達たちには、感謝しかありません。そして最終的には2位入賞できたのが嬉しかったです。これからもこの経験や留学での経験を無駄にすることなく、勉学に励んでいきたいと思ひます。

山口 みらい El Futuro

まさか私がスピーチコンテストに出場し、3位に入賞できるなんて夢にも思ひませんでした。初めは、このコンテストに出場することにあまり乗り気ではなく、自分のスペイン語に自信も持ていませんでした。しかし、一度決まったからにはやるしかありません。やって後悔するより、やらないで後悔する方が嫌だ、自分の人生を楽しもうという思ひで、このコンテストまでの日々を過ごしました。

テーマはまさしく人生について、そして世界中の自殺者についてです。最後には、「未来のことはなるようになるさ、心配しすぎないで。」という普段自分にも言い

聞かせている言葉を皆と共有したいと思ひ、付け加えました。私は練習中、この言葉に何度も励まされました。

コンクール当日、私は聞いてくれている人たちの目をしっかりと見て、私の伝えたいことが伝わるようにはっきりとゆっくりとスピーチをしました。最後には、ドリス・デイの「Que sera, sera」の一節を歌い、アクセントを付け加え、その言葉が印象に残るようにしました。コンテスト終了後、友達や先生方から「内容が素晴らしくて涙が出た。」と言ってもらひ、誰か一人の心にも届いたことにとっても嬉しくなりました。

小田島 ちとせ Un aspecto interesante de la cultura española

私は今回のスピーチコンテストが初めての参加でしたが、ずっと興味がありました。入学して初めての年にスピーチコンテストを初めて見て、先輩たちの堂々とした発表にいつか自分もこうなりたい！と強く思っていました。とはいえ、自分がいざその年になると、なぜかあまり自信が持てませんでした。しかし、今年の前期に履修していた上級スペイン語のクラスがとても楽しく先生が背中を押してくれたおかげで、上級スペイン語の5人のみんなと一緒に参加することを決めました。みんなで授業中、そして放課後などたくさん練習をして、すこしい思ひ出になりました。

私はこの発表で「スペインの興味深い文化」について発表しました。正直テーマを決めるのはすごく時間がかかりましたが、実際にスペインに留学した自分が感じた日本との違いを他の学生にも共有できてとても嬉しかったです。観客の皆さんから素敵な賞をいただきましたことはもちろんとても嬉しいですが、なにより自分のスペイン語に自信を持てたことがこれからの言語学習のモチベーションになりました。本当に参加してよかったです！ありがとうございました。

角山ゼミナール

「鎌倉別館40周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」を鑑賞して

国際日本学部 国際文化交流学科3年
名古屋 琉夏

はじめに

「デザインと社会」というテーマで活動している角山ゼミナールでは、文献購読や個人研究を通してデザインを歴史的に考察し、そこから対象物の分析と調査に基づきデザインの意義や社会的役割を考えている。その中で2024年6月8日(土)に課外授業として展覧会鑑賞を行なった。今回は、神奈川県立近代美術館鎌倉別館で2024年5月18日(土)から7月28日(日)まで開催された「鎌倉別館40周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」という展覧会へ訪れた。

美術館は作品を展示し届けるだけでなく、コレクションを良い状態で保存し次世代へ伝えるという役割も担っている。近年増加している自然災害や気候変動、そして社会的要請の変化の中で作品を守る環境を整え、手当てをしながら作品を未来に残すための最善策を模索している。このような普段見ることのない美術館の取り組みを、「てあて」「まもり」「のこす」という3つの言葉から紹介するのが今回の展覧会である。会場



「てあて・まもり・のこす」展の看板

では、作品の修復過程とそこで使用される道具、そして、作品を守りながら展示するための工夫などが、実際に修復を受けた作品とともに紹介されていた。

この部門では1980年代から現在までに「てあて」を受けた作品の一部が展示されていた。その中で古賀春江の《窓外の化粧》(図1)が印象に残った。この作品で行われた作業は黄ばみを落とすことと額縁の修復であった。1992年に修復が行われ、塗られていたニス洗浄し黄ばみを落とす。そしてキャンバスと木枠を分解しキャンバスの洗浄と木枠の交換が行われ、色が薄くなっているところに色を加えて新たなニスを塗るといった作業が行われた。そして2010年には作品の運送中にキャンバスの揺れを防ぐために額縁の修復も行われた。

私はこの作品を最初に見たときに「色鮮やかで明るい作品である」という印象を受けた。しかし、この色合いが見られることには、先ほどのような作品の修復作業が重要な役割を果たしているということを強く認識した。

「まもり」

この部門では絵画の保護に重要な役割を果たす額縁をはじめ、作品を安全に運び展示する方法や作品を守



図1. 古賀春江《窓外の化粧》
1930年 油彩、カンヴァス
神奈川県立近代美術館蔵

る環境作りなど、作品を「まもり」ながら活用するための取り組みが実際の資機材とともに紹介されていた。その中で高橋由一の《江の島図》(図2)が印象に残った。この作品は1876-1877年に作られた作品であり、作品だけではなく額縁もとても古いものであるため価値が高いものである。この作品は1985年に経年劣化による欠陥の処置が行われたため、作品自体は安定した状態にある。しかし額縁には布が貼り付けられており、その布が著しく劣化している。そのため2009年以降、他の美術館へこの作品を貸し出す際にはオリジナルの額縁を模して作成された貸出用額縁をつけ、取り扱いに十分注意をしている。

実際にこの作品を見ると、額縁の布の部分が破れていたり、ひびが入っていたりする部分が多く見られた。しかしこの額縁も作品の一部として作られているからこそ、額縁を取り替えるのではなくそれを「まもる」ために新たに額縁を作成するという取り組みに感激した。このように作品を「まもる」取り組みがあるからこそ、我々は作品を鑑賞できているのだということを実感した。

「のこす」

最後に「のこす」部門では作品をどのように残していくのかについて紹介されていた。その中で私が一番印象に残ったものは作品の収蔵庫に関する内容である。収蔵庫は調湿機能があり作品へのあたりが柔らかい木材で作られている。しかし、木材には有機酸を放



図2. 高橋由一《江の島図》1876-1877年
油彩、カンヴァス
神奈川県立近代美術館蔵

出すというデメリットがあるため、それを放出しない人工材料と木材を併用して作品を良い状態で残す取り組みを行なっている。このことから作品を展示する環境を調節するだけでなく、数多くの作品を後の時代に受け継ぐために保存の環境に関しても様々な取り組みが行われているというのを知ることができた。

また、作家が制作した作品を当時の状態を保ち、作品への介入を最小限に抑えることが修復の基本とされている。しかし、作品の性質によっては保存や修復が困難なものも出てくる。その際に、作家が存命のうちに作品の保存についての話し合いを行い、その記録を残しておくことも重要である。これらのことから作品を修復する時には、「状態を良くする」ことではなく、「制作された当時の状態をできる限り維持すること」を最優先で考え作品を後世に「のこす」取り組みが行われているのを知った。

現在、美術館や博物館などで鑑賞が可能である作品は、修復作業という「てあて」、作品を「まもる」環境づくり、そして、その作品を後世に「のこす」という取り組みを経て、我々のもとに届いているということを知ることができた。これらの活動は、今後も増え続ける作品にとって必要不可欠なものであり、これらの取り組みを「まもり」、「のこす」ことも未来の芸術文化に繋げるために必要であると考えた。

今回の展覧会を通して、修復作業の内容、そして作品を守り、残すための取り組みを知ると共に、その重要性を強く感じた。しかし、修復作業の後継者はいるものの、修復作業を行う場所が少なく、国からの支援も十分ではないため厳しい現状であるということを知り、今回の展覧会を企画し、実際に現場で作業を行なっている

る学芸員の橋口由依さんが教えてくれた。これを受け、この取り組みがさらに広まり作業場や支援などがさらに拡大し充実した体制が整えられることを願う。

【参考】

- 鎌倉別館40周年記念 てあて・まもり・のこす 神奈川県立近代美術館の保存修復」配布資料
- 会場解説文

【図版出典】

図1、2

神奈川県立近代美術館



野外彫刻・柳原義達《犬の唄》(1983年)の前で

秋山ゼミナール
「横浜トリエンナーレ」
フィールドワーク

フィールドワーク

外国語学部 中国語学科3年

水上成実・塩家 亜胡・土屋恵・廣田葉奈

柳沢慶介・寺崎大悟・池田亜美香・伊東美秋

2024年3月15日から6月9日まで、みなとみらい地区で開催された国際展、横浜トリエンナーレのテーマは「野草・いま、ここで生きてる（野草・私たちの生活）」である。北京を拠点に国際的にも活躍するリウ・ディン（劉鼎）とキヤロル・インホワ・ルー（盧迎華）は、中国の文学者、魯迅がほぼ100年前に書いた短文集「野草」に基づいて、災害や戦争、大量消費による環境破壊など、私たちが直面している現代の状況をそれぞれの方法で捉えた作品群をキュレーションしている。私たち秋山ゼミは、5月7日にこの横浜

トリエンナーレでフィールドワークを行った。ここでは、ゼミ生8人それぞれが最も印象に残った作品について展示順に従い紹介する。

水上成実

私は横浜美術館に入つてすぐに展示された、ウクライナの複数のアーティスト、オープングループによる《繰り返ししてください》が印象に残った。ウクライナ戦争で実際に聞こえる爆弾や銃弾、戦闘機を模した大きな音が館内に響き、作品名の通り、「繰り返しそう」と思ったが、模倣した声から戦争や人間の怖さを感じ、繰り返しできなかった。

塩家 亜胡



オープングループ《繰り返ししてください》(撮影：水上成実)

私が特に印象に残っているのは、志賀理江子の《霧の中の対話…火―宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》という作品である。この作品は、鹿猟師である小野寺さんに写真家の志賀さんが実際に行ったインタビューを、そこで撮った猟の写真と組み合わせ提示する内容になっている。作品に使われている写真は、実際の猟の様子に加え、解体の場面や処理し終わった後の無数の骨など、生々しくもリアルティ溢れるものだ。この作品には猟師の心情や、食べ物に感謝するという言葉の真の重みなど、様々な事を考えさせられるため、是非多くの人に見てもらいたい。



志賀理江子《霧の中の対話：火―宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》(撮影：塩家亜胡)

土屋 恵

今回の横浜トリエンナーレのフィールドワークでもインパクトを受けた作品は、アメリカの作家、ジョシュ・クライン (Josh Kline) の「失業」シリーズである。スーツを着ている中年の男性や女性が、透明なゴミ袋の中に粗大ごみのように入れられて棄てられている。これは弁護士や会計士、銀行員、秘書などのホワイトカラー労働者が、AIなどの技術革新や社会の変化で20年後にはなくなってしまうかもしれない、大量失業への不安を表現している。しかし、ゴミ袋に入れられている人の表情はとても穏やかであり、少し思いとは違う仕事から解放されほっとしているようにも見えた。



ジョシュ・クライン
《長年の勤務に感謝(ジョアン/弁護士)》
《総仕上げ(トム/管理職)》
(撮影:土屋恵)

私は今回の横浜トリエンナーレの作品のなかで富山妙子氏の作品が印象深かった。彼女の作品からは争いながらもたらず悲壮感と憎しみ、思想や言論の自由を手に入れることの難しさが伝わってくる。その中でも『民衆の力』という光州事件を描いた作品が特に印象に残っている。この作品で民衆が持っている韓国語のローガンは、日本語に直訳すると「共に死んで共に生きよう」という意味になるのだが、なぜ死が生より先なのかを考察することが興味深かった。作品を自由に解釈できるところが美術作品を見ることの面白さなのではないかとも思った。

柳沢 慶介

私は、エクスパバー・エクサー (Xper.xr) の《機械じかけのおもちゃの猫》という作品に注目した。おも

ちゃの猫は、ロンドンや香港などで行ったパフォーマンス(ザ・ビッツ、ザザーク・ブレイハウス)の小道具として使われていたと知り、おもちゃの猫を道具にするといった発想は頭に浮かばなかったので、衝撃を受けた。機械の猫は集合体恐怖症であるエクスパバーが本番前に緊張をほぐす役割を果たしていた。本物の猫と同様に、機械の猫にも癒す力があることに気付いたとき、パフォーマンスの小道具に使われる理由が納得できる作品だと感じた。



エクスパバー・エクサー (Xper.xr)
《機械じかけのおもちゃの猫》
2002 (撮影:柳沢慶介)

私が特に印象に残ったアーティストは、柳沢さんと同じく、エクスパバー・エクサー (Xper.xr) である。彼は香港で活動するアーティストで、ミュージシャンとしての一面も持っている。彼の作品は挑戦的な作品が多く、荒れていた幼少期を感じさせる《カウインターテールトップ》という作品や風刺漫画のTシャツを使った《火炎瓶》という作品が攻撃性を表していると感じた。また、今回の展示で《無題》という作品が2つ展示されていたのだが、そのどちらも赤黒く、まるで血を彷彿とさせる作品であった。彼の作品からあふれ出る世界への反抗心をぜひ多くのの人に感じてもらいたい。

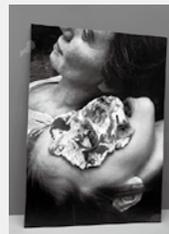
池田 亜美香

最近ヴァイガンとベジタリアンの違いに興味を持つ出来事があり、人間をひとつの動物とみているよう



エクスパバー・エクサー (Xper.xr)
《無題》1991/2021
(撮影:寺崎大悟)

アネタ・グシェコフスカ (Aneta GRZESZYKOWSKA) の《MAMA no.22》が私の印象に残った。弱肉強食の社会で当たり前のように食べられている動物だが、それを人間に当てはめているようなそんな作品であった。グシェコフスカの作品全体には人間や犬が登場するが、それらは決して普通の姿で見ることはできず、当たり前が当たり前ではないというメッセージを私は彼女の作品から読み取った。今の日常を当たり前と思わず、小さなことにも感謝の気持ちを持つことを大切にしたいと改めてこの作品を通して感じた。



アネタ・グシェコフスカ
《MAMA no.22》
(撮影:池田亜美香)

伊東 美秋

私が一番印象に残った作品はユア・ブラザーズ・フィルムメイキング・グループ(你哥影視社)によってつくられた《宿舍》という作品である。これは台湾の工場で働くベトナム人女性たちが寮に立てこもってストライキを起こした時の部屋を再現した作品である。この部屋の様子を見ると、互いのベッドの距離がとても近いためプライバシーの空間がなく、女性たちはこの苦しく過酷な状況の中、遅く生きていたことが感じられる。またこの作品は自身がその場にいるかのような臨場感があり、当時の部屋を再現したことでよりダイレクトに世界観を感じることができた。

今回の横浜トリエンナーレのアーティストック・ディレクターが中国人であり、テーマは魯迅が書いた『野草』ということもあり、中国と非常に縁のある点から、私たち中国語学科としても非常に良い経験になった。今私たちが生きているこの時代は非常に殺伐としている。戦争・紛争のニュース、経済格差、政治

的な問題、未来に対する漠然とした不安といった複雑な問題を私たちは抱えている。この殺伐とした現代を野草のように生きていくために私たちは前を向いて互いに協力し、手を取り合い、目の前の課題を一つ一つ解決することが大事なのだと、このトリエンナーレから強く感じる事ができた。



ユア・ブラザーズ・フィルムメイキング・グループ《宿舎》
(撮影者：伊東美秋)

ウエルカーゼミナール 秋葉原探訪レポート

国際日本学部国際文化交流学科

3年 山本 拓実

国際日本学部日本文化学科

3年 長谷川 天駿



ジェームズ・ウエルカー先生のゼミナールは毎年秋葉原を訪れます。このゼミナールでは日本のポップカルチャー、例えばオタク文化などにあるジェンダーを扱います。その為日本のオタク文化の中心である秋葉原は重要な場所なのです。まず秋葉原駅に集合し、秋葉原の歴史について先生から教わりました。

メイドカフェを訪れると、みんなは中々店の奥の方へと進むのを躊躇っており、前の方にいた私だけ押し出されてしまいました。日本ではオタクが受け入れられるようになってきていると聞きますが、人前でオタクらしい物へ触れようとするのには恥ずかしさを感じるのでしょうか、

メイドさんが即興で書いた猿



実際にはまだ日本ではオタク文化は恥ずかしい文化といった面が残っているのかもしれないと思いました。店内では先生にバフエなどをご馳走になりながら、メイドさんによる会話・おまじない・ダンス・チエキなど、メイドカフェらしいものを楽しみました。メイドさんがオムライスにイラストを書く際にはお客さんにリクエストを聞くのですが、その後、何も見ずにかわいい絵をケチャップを使いながら描いていて感動してしまいました。ダンスをしている時もあるいろいろなお客さんに視線をしっかりと送っていて、メイドさんの姿を体感することができました。

その後は秋葉原の散策をしました。秋葉原やオタクと聞けばアニメ、漫画などそういったものを今は思い浮かべますが、訪れたラジオ会馆などにはSF・人形・モデルガンなど、以前はオタクという言葉でアニメ、漫画と一緒に思い浮かべられていたジャンルのお店が残っていました。

散策の後は最後の目的地の明治大学にある米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館を訪れました。この図書館は漫画、雑誌、同人誌、それらに関する学術書など40万冊が所蔵されています。国会図書館では多数の雑誌を管理する為に背表紙をくっ付けて保存します。これによってくっ付けられた面やスタンプで隠れた部分の情報は失われています。ですがこちらの図書館は雑誌をできるだけそのままの姿で保存するために、管理用のバーコードなどの情報は別紙に全て記し、状態の保護のためにビニール袋を本全体に被せるという保存が為されています。これらから雑誌という形を大切にしているということが伝わってきました。特別に通していただいた4階の書庫では少年ジャンプやサンデー、ちやおを始めとする数え切れないほどの雑誌が

先述した方法で保存されていました。背表紙もすっかり残っているため、例えば少年ジャンプでは先日亡くなったしまった漫画家の鳥山明先生の初連載作品、「Dr. スランプ」の連載開始から終了、「ドラゴンボール」の連載開始から終了までの軌跡が背表紙から手に取るようにわかり、背表紙が貴重な情報源であることを実感しました。

私達は雑誌の中の漫画という部分だけに注目しがちですが、雑誌というメディアの形によって付随する情報も漫画とつながった大切な情報という事に気づかされました。

台湾国立中山大学との交流セミナーの開催

「黄金町フィールドワーク」

通して考える地域再生」 観光文化コースのコース演習Ⅰ

崔クラスの取り組み

国際日本学部 国際文化交流学科2年

江原 由美・新保 みくり・原沢 怜佳
氏川 晴仁・梅田 千帆・松原 穂佳・吉田 礼萌
若杉 日和・阿武 弥春・杉原 彩華・岩崎 真希
坂井 勝永・嶋崎 結菜・鈴木 里奈・増田 有紗

1) はじめに

国立中山大学西湾学院社会創新大学院の夏休み日本見学クラスを履修する学生10名(社会創新大学院修士学生7名、学部生3名)と教員ら2名の12名が2024年6月22日(土)、神奈川大学を訪問した。台湾の学生達は、6月19日から29日までの間、日本に滞在しながら、台湾の社会課題を解決するためのヒントを得る

ために、SDGsの実現に関わる日本の各組織の取り組みを視察した。本学訪問時には、本学の国際日本学部国際文化交流学科の観光文化コース2年生15名とともに、黄金町を視察したあと、お互いの研究内容を報告する交流セミナーを開催した。両大学の学生達は、一緒に黄金町に赴くことで

現地では分からない新たな事柄を発見し、交流するなかで新たな視点を得ることが出来た。

2) 黄金町での視察

黄金町は、至る所にアートが置いてある。例えば、ゴミ箱にアートがあるなど、スタンブラリーのような感覚でアートを楽しむことができる。まちを歩くだけで新しい発見があった。例えば、ミラーボールのようなものに植物が入っており、その上に小さい人の人形があり、作品一つ一つ工夫してあって、飽きる事がなかった。実際訪れてみて、アートのまちとなっている状況を確認できた。黄金町エリアマネジメントセンターの事務局の方々のレクチャーを受け、どのように黄金町が変わってきたかを学べた。また、日本人だけではなく外国人のアーティストも多いことに驚いた。

3) 台湾の学生達との交流

黄金町の視察の後に、大学まで移動する時は、台湾の学生達と交流しながら、電車と徒歩を使った。電車を待つホームでは、台湾の学生と本学の学生、それぞれの班に分かれて各国の文化や日本のおすすめのものを共有した。台湾の学生の中には日本語ができる



黄金町エリアマネジメントセンターでの見学の様子

学生もいて、英語、日本語の両方を使いながら会話した。本学1階のVOYAGEにて昼食をとるとき、券売機の使い方に慣れていない台湾の学生たちに使い方を教える場面があった。コミュニケーションをとることの難しさを痛感した。昼食中は、台湾の文化を聞き、日本の学生の中で流行しているものを話した。台湾の学生は連日の視察で疲れている中、意欲的に日本のことについて話してきてくれて、我々も台湾について興味・関心を持つようになった。

4) 台湾からの学生達とのキャンパスツアー

私たちがキャンパス内で紹介したのは、最上階のレストラン「Light House」、7階の学食、外のテラスである。天気が良かったのでみたとみらいが一望でき、富士山を見ることができた。大学の隣にあるコンビニと一緒にいき、日本の美味しいコンビニスイーツや私たちがおすすめのお菓子を紹介し、みんなでお菓子を交換し合いながら交流することができた。キャンパス内を回っている時に、台湾の学校では学食はどうなっている、教室はどう日本と違うのかなどを教えてください、短かったが有意義な時間を過ごすことができた。

5) 交流セミナーの開催

交流セミナーでは、お互いの発表を聞き、学びになることが多かった。相手から質問などを受け、自分たちでは気づけない部分を指摘してもらい、新たな問題に気がついた。

「横浜中華街の移り変わり」に関する発表では、中華街の店舗の経年変化や抱えている課題を把握し、改善提案をする発表を行った。横浜中華街は、横浜の観光地区として有名であり、台湾の学生達が興味を持つテーマでもあった。「横浜のインバウンドにおける観光

の潮流」に関する発表では、神奈川県において日帰り観光客の割合が高く、横浜ではなく東京に宿泊する観光客が多いことを指摘し、横浜のホテルにおける課題について報告した。「音楽と横浜のまちづくり」をテーマにした発表では、横浜にライブ会場が集結する理由とまちづくりの関係について報告した。横浜で音楽を用いたまちづくりが実践されていることを報告した。

台湾の学生側による発表では、少子高齢化、働き方の問題、まちのイメージ改善など台湾の抱えている様々な社会問題や地域問題について知ることができた。台湾にも日本と類似した社会問題があるからこそ、日本の取り組みについて積極的に学ぼうとする姿勢を感じた。神奈川大学の学生側と中山大学の学生側が互いに質問をしあうことで、より交流を深めることができた。

6) 全体の振り返り

海外の学生達との交流セミナーを準備するなかで、上手くコミュニケーションをとれるかが不安であった。また、初めは言語や文化の違いによる戸惑いもあったが、徐々に会話をするようになり、一緒にアートのまちづくりの様子を見て回るなかで、距離を縮めることができた。日本の食べ物やアニメ等について会話する時間は楽しく、台湾の学生達が積極的に日本語を交えながら話しかけてくれたので嬉しく感じた。台湾の学生達の真剣に質疑をする姿を見て、一緒に議論したことは貴重な経験になった。



台湾学生の研究発表

講演会

「アイヌ語」開講記念講演会（第2回）報告

国際日本学部 国際文化交流学科
廣瀬 富男

去る3月、神奈川県国際日本学部国際文化交流学科「アイヌ語」開講記念講演会の第2弾が行われ、アイヌ民族・文化の若手伝承者として活躍の関根摩耶さんを米田吉盛記念ホールにお迎えしました。講演タイトルは、「私のアイヌ〜平取町二風谷の育ちから〜」です。

講演は多岐にわたる内容でした。アイヌの工芸に始まり、料理、狩猟、ことば、ご出身地の二風谷、そしてご家族の話に至るまで、様々なエピソードが「ユカラ（yukar）」しながらに語られました。その壮大な「物語」の時間は、誰もが楽しめるアクティビティが至る所に散りばめられ、あっという間に過ぎていきます。

お馴染みの「アルプス二万尺」の遊びをアイヌ語学習用の替え歌でやってみたり、アイヌ語に関するクイズに挑戦したり、「アイヌ語に色を表す語はいくつあるか?」「[ay-ko-si-ran-suypa「自分で・自分(の)・心・(を)揺らす(複数形)」という動詞はどういう意味か?」—みなさんなら、どう答えるでしょう?」講演で特に印象に残っているのは、「消滅危機言語（endangered language）」の話題の中で、関根さんが、ニュージーランドの「マオリ語（Maori）」の復興を可能にした「テ・アタランギ（Te Aatanga）」という言語習得法に触れ、「将来はアイヌ語のみで運営する保育園を作りたい」と述べられた点です。まだ20代半ばの彼女のこの言葉の中にアイヌ語復興の予兆がある—そういう思いを抱きました。

講演終了後は、「イタ（itá）」という一品物のアイヌ彫刻のお盆や、アイヌ紋様をあしらった小物の販売がありました。筆者は、司会を務めていましたが、聴衆に交じってテーブルの上の物の品定めをしつつ、最終的にハンカチとコースターを購入しました。今回の講演会のよい記念になると思います。

当日は、50余名の参加者を集める盛会となりました。講師の関根さんをはじめ、ご参加いただいた方々、また、開催に向けて様々な形で協力いただいた方々に、心より感謝を申し上げます。

さて、今回の講演を機に、アイヌについてもっと知りたくなったという方も多いと思います。そういう方、加えて、この記事を読んでアイヌに興味をお持ちになった方には、「アイヌ文化交流センター」という施設が台東区元浅草（JR御徒町から徒歩13分）にあるので、一度足を運んでみることをおすすめします。アイヌ関連の蔵書や映像資料が充実しており、日がな一日、アイヌ文化に浸れる場所となっています。

また、みなとみらいキャンパスでは、4月から「アイヌ語Ⅰ」（火曜日3時限）が開講され、5名の1年次生と1名の大学院生が、藤田護先生のご指導の下、楽しくアイヌの言葉・文化・社会について学んでいます（新カリキュラムにより、2〜4年次の学生、及び大学院生は、聴



講のみ可)。後学期の「アイヌ語Ⅱ」では、知里幸恵の『アイヌ神謡集』を中心に学習を進めていくことになっています。『ゴールデンカムイ』のコミックや映画でアイヌに関心をもった新入生のみなさん、来年度以降、「アイヌ語Ⅰ・Ⅱ」を受講して、もっとアイヌの世界を体験してみませんか？



PLUSi Alius VOL.3 2024年9月30日発行
編集・発行 神奈川大学 人文学会学生部会 PLUSi 編集部
制作協力 富士オフセット株式会社